円満坊と阿弥陀如来坐像

桜の名所、「桜塚円満坊」

福与の福沢に所在する円満坊は、「真言宗の寺院の旧跡」といわれ、「桜の名所」として知られてきました。古来、参道の桜並木が有名で、江戸時代には阿島の旗本知久氏の奥方や女中衆がお花見に来て、その行列がたいそう美しかったとも伝えられています。今日では桜並木はほとんどなくなり、境内南の旧参道入口にその大木をわずかに残しているに過ぎませんが、昭和の初期には「桜塚円満坊彼岸桜」として伊那谷十景の第一位に推されたこともありました。

境内には幕末の安政3年(1856)初冬12月に桜下亭粗州が建立した「桜」にちなむ芭蕉句碑があります。

山さくら瓦ふく物先二つ　　芭蕉翁

と、ほかに半掃庵と一筆坊の句が刻まれています。

雲でなし使は来たり山桜　　半掃庵

嗚呼さくら雪踏の音の山路哉　　一筆坊

芭蕉の句は貞享3年(1686)の作で、『笈日記』の中にあり、その前書によると、芭蕉翁が吉野山で詠んだ句であることがわかります。半掃庵は尾張藩の重臣で、俳人として有名な横井有也で、一筆坊は当時名古屋の有名な俳人で、谷一筆坊といいます。句碑建立当時、半掃庵は73歳、一筆坊は51歳でした。これを建立した桜下亭粗州は名主福与家の人とみられますが、俗名および俳句の系統等は明らかでありません。粗州は円満坊の桜にちなみ、芭蕉の句から桜を詠んだ句を選び、句友の発句を添え建碑したものと考えられます。おそらく粗州は名古屋在住であったものとみられます。「桜下亭」を名乗っていますから、粗州の桜に対する思いは人一倍強かったものに違いありません。本碑の原書は軸装され、かつて名主をつとめた福与家に保存されています。

句碑はもと大門の入り口、即ち桜塚の最南端の桜の木の下に西面して建てられていましたが、明治年間に部奈線の開鑿に当たって現在位置に移されました。

「桜」の句を刻んだ芭蕉句碑

閻魔堂が円満坊に変化か

江戸時代の『信濃州伊奈郡神社佛閣』には川東伴野庄として、「福與村　福澤」、「一真言宗　俗ニ圓満坊ト云　焔魔堂」とあります。本書が記された江戸時代中期末ころは「焔魔堂」、即ち「閻魔堂」で、俗に円満坊と呼ばれていました。よってこの段階は閻魔王をはじめとする十王一具を祀った「閻魔堂」であったものと思われます。円満坊から西南へ600mの地には応安寺という寺院跡があります。南北朝時代の応安年間（1368～74）に創建されたという真言宗の寺院で十一面観音菩薩を本尊としていましたが、江戸中期末に廃寺となりました。当時、この近くに同宗の独立した寺院が二つあったとは考え難いことから、あるいは応安寺に関係する塔頭(たっちゅう)のような小寺か何らかの施設があったものかも知れません。江戸時代には応安寺関係の閻魔堂があり、俗に円満坊と呼ばれていたものが、やがて一般に定着したものと思われます。

円満坊西南の一段下、県道に沿った位置にかつては十王堂が存在しました。ここに安置されていたとみられる十王像、即ち閻魔王らと円満坊・応安寺の間には複雑な関係があるものとみられますが、それを記す資料はありません。「焔魔堂」、即ち「えんまどう」が「えんまんぼう」に変化していることは確かなようです。円満坊が「真言宗の寺院跡」という口碑も、あるいは廃寺になった近くの真言宗応安寺の諸伝と関連しているものでしょう。

巨大な供養塔と舞台

円満坊の境内入口に巨大な角柱の供養塔が二基あり、門柱をなしています。向かって右が三界萬霊等で、「生国遠州有玉」、「頓龍残置之」、「元文元年丙辰七月四日」とあり、左は南無阿弥陀仏の名号塔で、「内藤氏　福与六郎左衛門茂宗　建焉」、期日は右と同じ、「福沢此時地主」とあります。江戸時代中期の元文元年(1736)7月、遠州有玉の頓龍和尚が記したものを石塔に刻み、福与村名主、福与六郎左衛門が建立したものです。福与村は河野の曹洞宗泉龍院との結びつきが強く、同村の嶺岳寺は泉龍院十三世台岩呑鏡和尚の開山で、その本山泉龍院自体も遠州大洞院（遠州堀越可睡斎海蔵寺）の末寺です。泉龍院住職呑鏡和尚は遠州出身で、この縁により同じ遠州出身の頓龍和尚が福与を訪れた際、名号等を記したものとみられます。

名号塔の台座には、「寛政十二年庚申二月日愚弥福与六郎左衛門茂尭　此所引」とあります。重要なのは「福与六郎左衛門茂尭　此所引」です。供養塔造立から 64 年後、江戸後期の寛政12年(1800)2月、茂宗の子あるいは孫の茂尭が何処かからこの二つの供養塔を引き移しているということです。よって二つの巨大な供養塔は、当初から円満坊に造立されたものではないということになります。60年に一度巡ってくる庚申（かのえさる:こうしん）の年、これを記念して庚申信仰の主尊の一つでもある阿弥陀如来の名号、南無阿弥陀仏を記した巨大な供養塔を、あるいは廃寺となった応安寺か近くの嶺岳寺から引き移し、円満坊の門柱としたものと考えられます。

境内の舞台は間口6間という規模の大きなもので、ここで素人歌舞伎や人形浄瑠璃などが盛んに行われました。幕末の安政の頃（1854～59）に火災で焼失し、その後現在の舞台が建てられ、今は福沢自治会（34戸）の集会所に利用されています。こうした舞台は、普通は神社に付属するものであることから、伝えられる円満坊という仏に帰する施設と舞台の関係は不明です。あるいは今も福沢自治会で祀る円満坊東上の秋葉様や津島様など、神社関係の舞台かも知れません。

かつてこの舞台などで演じられた福与人形浄瑠璃の人形はじめ諸道具が明治10年代末に龍江の今田に売却されています。今田では福与人形道具一式を購入することによって、明治20年代に今田人形を再生することができたのです。

円満坊の阿弥陀如来坐像

かつて円満坊の舞台の一角には麻袋に入れられたバラバラの状態の仏像がありました。戦後、国宝審査員荻野仲三郎、文部省国宝監査官丸尾彰三郎氏らの調査もあり、「優作」であることの鑑定を受けていましたが、損傷が著しく、専門家もこれを惜しんでいました。昭和33年、下伊那史編纂会の依頼により来郡した文部省文化財保護委員会、文部技官倉田文作氏は二回にわたる調査に基づき、「製作年代は、手法様式よりみて平安時代藤原後期、いわゆる藤原時代の優れたものとして特に注目される。」との見解を示されました。

昭和44年（1969）2月、地元福沢部落で組織する円満坊本尊阿弥陀如来修理復元委員会は修理復元趣意書をもって大方各位の協賛を仰ぎ、同年9月、町教育委員会の指導・協力のもと、飯田市在住の彫刻家倉沢興世氏に修理復元を依頼しました。同氏は百余日を費やして修理復元を完成させ、福与区では地元の文化財を永久に保存することを念願し、境内のやや高いところに耐震耐火コンクリート造りの阿弥陀堂を新築して本像を安置しました。

円満坊の阿弥陀如来は木造の坐像(ざぞう)で、像高は84．5㎝です。頭の頂の部分が盛り上がり（肉髻・にくけい）、その正面に如来像だけが持つ肉髻珠(にくけいじゅ)といわれる珠(たま)があり水晶が埋め込まれています。ここから如来の使いとしての化仏(けぶつ)が、泡が吹き出るように吹き出されているといわれます。髪の毛はちぢれて右巻きの小さなぶつぶつになっています。これは螺髪(らほつ)といわれる如来像独特のものです。仏像を作るときの細かい約束（三十二相）によれば、仏の体の毛のすべては上向き右巻きに生えているとされ、螺髪はこのこと

を強調して刻まれています。額には白毫(びゃくごう)といわれる第三の目があり、水晶がはめ込まれています。衆生に仏の慈悲が行き渡るのを見届ける目であり、また過去・現在・未来に及ぶすべてを見通す目でもあります。白玉のような光を発し、一本の長い羊毛が伸び出ているとされます。首もとには豊かな人格を表すとされる三道(さんどう)といわれる三本のたるみがあります。

身体には衲衣(のうえ)といわれる長方形の大きな布(袈裟)をまとっています。衲衣は、仏教僧が敬意を表す人に対して右肩を脱いでかける偏袒右肩(へんだんうけん)の形に表されます。身体の右半分を神聖とし、左半分を不浄としたインドの礼法で、尊ぶ人に対して不浄の左半分を隠したものといわれます。両手の臂を曲げ(屈臂・くっぴ)、左手の掌(たなごころ)を上にして、右手掌を前にして各第一・二指を捻ずる上品下生(じょうぼんげしょう)の来迎印(らいごういん)を結び、右足を外にして坐禅の形のような結跏趺坐(けっかふざ)をしています。

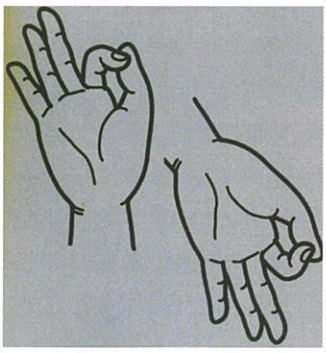
像の構造は、頭体幹部を正中線と両耳中央から体側を通る線で矧(はぎ)合わせた四材から彫り出し、内刳(くり)を施し、割り首を行っています。この根幹材に左肩外側材、両足部材を矧(はぎ)たし、左手は袖口上面と手先矧付(はぎつ)けとし、右手は肩、臂、手首で矧いでいると思われます。

円満坊に伝わる木造阿弥陀如来坐像　(平安時代、長野県宝)

現在、表面は胡粉(ごふん)の上に墨を塗っていますが、これは江戸時代の補修といわれます。螺髪に一部が欠損し、鼻が木屎漆(こくそうるし)の盛り上げによる補修を受けているほか、肉髻珠、白毫珠、両耳朶(じだ)、右手第一指、第二・三・四・五指半先、左手先、左袖口上面、右膝奥、裳先、像底地付廻りが後補(昭和44年)のものに変わっています。

丸顔に小ぶりの目と唇を刻む穏やかな顔を示し、上体の量感を減じ、膝の厚みも薄く、着衣の衣文(えもん)は浅く流れるように刻まれており、その作風には平安時代末期、12世紀後半の特徴が顕著に表れているといわれます。等身の像にもかかわらず、頭体幹部を四材から彫出する細かな木寄せも、この頃の技法として矛盾しないともいわれます。

平安時代末期に製作された阿弥陀如来像と円満坊の関係や阿弥陀如来自体の来歴も伝承・史料等が存在せず、一切は不明です。



上品下生の来迎印

本像の保存状態は必ずしも良好ではありませんが、平安時代末期の中央の作例を忠実に学んだ遺品であり、県内でも比較的この時代の遺例に恵まれる下伊那地方においても、その代表作の一つとして注目され、昭和46年7月7日、優秀文化財として長野県宝に指定されています。

応安寺と十一面観音菩薩坐像

円満坊の石段を上った高い所にある小さな観音堂には、かつて円満坊の南に存在した真言宗応安寺の本尊、木造十一面観音菩薩坐像が安置されています。

円満坊にある石燈籠は江戸時代中期の享保年間に三代で絶家した駒場中関の福与代官宮崎新七郎の年忌供養のため、福与村の名主福与六郎左衛門茂宗が建立したものです。燈籠の竿には、「元文元丙辰七月四日　応安寺観音堂移此　為　宮崎新七郎様　福与　福与茂宗」とあり、元文元年(1736)7月4日に応安寺の観音堂が移転されたことを示しています。江戸中期、既に応安寺は衰微していたため、名主の福与六郎左衛門は元代官宮崎新七郎の追善供養として応安寺と関係のあった焔魔堂(円満坊)へ応安寺本尊を移転、祭祀したもので、この時点で元の応安寺は廃寺になったものとみられます。江戸中期末の『信濃州伊奈郡神社仏閣』に応安寺が記録されていないこともこれを証しています。

十一面観音は桧(ひのき)の寄せ木造りで、金泥を塗り、衣は盛り上げて彩色され、面長で髪のスタイルに特徴があります。化仏(けぶつ)や持物(じもつ)は失われ損傷は著しいですが、南北

旧応安寺本尊、木造十一面観音菩薩坐像　（南北朝時代）

朝時代の様式を伝える室町時代初期の都における作品で物が良いと鑑定されています。650年をさかのぼる南北朝時代の優作として平成7年に松川町文化財に指定されています。

円満坊の十王像

円満坊の観音堂には「天和3年造立、福与村の十王」という以外、来歴のわからない木造の十王像も併せて安置されています。十王像のほとんどはバラバラとなり無造作に積み重ねられた状態となっていましたが、平成20年末にクリーニングと接合補修が行われました。

十王像10体について個々の王名はわかりません。像の損傷は著しいものですが、木彫・寄木造りで胡粉・彩色されており、往時は極彩色の厳格優美な十王諸像であったことが偲ばれます。十王に付属するものとして、地蔵菩薩像1体、奪衣婆(だつえば)像1体、司命あるいは司録像の1体があります。特に奪衣婆像は残存部ながら優れた彫像で、この地域を代表する秀作といえます。

木造十王像のうちの一体　（江戸時代）

木造奪衣婆像　（江戸時代）

一体の十王の台座裏には、「天和三年□□癸亥九月吉日　信州下伊那郡福与村□此内ニ堂守アリ」の墨書銘があり、江戸前期末の天和3年（1683）9月、福与村の人々が造立し、このとき堂守(どうもり)がいたことがわかります。閻魔王と表裏一体の関係の地蔵菩薩像にも「伊那郡福与村」の墨書があります。

江戸中期末、円満坊は焔魔堂（閻魔堂）と記録されていました。この十王像が円満坊にあったものか、十王堂から移されたものか、あるいは円満坊にあったものが十王堂に移り、再び故地の円満坊に戻っているものか等々、定かでありませんが、円満坊の歴史や阿弥陀如来の来歴を解く一つの鍵となるものかもしれません。

極楽浄土への往生を願って

阿弥陀如来の信仰を主題とする経典のうち『無量寿経』は、阿弥陀如来は極楽浄土において現に説法していると説きます。「なむあみだぶつ」と阿弥陀如来の名を念仏すれば極楽浄土に往生し、そこで無限の生命が得られ、心安らかに生活ができると説いたのが阿弥陀信仰です。平安時代の末法思想の流行とともに死後の往生を説いた阿弥陀信仰が世間に広く受け入れられ、阿弥陀如来が造立されました。

近世の福与村の人々は、焔魔堂（円満坊）、もしくは十王堂において勧善懲悪、因果応報を説く冥府(めいふ)の閻魔王ら十王に、自分自身や縁者の後生善処を願い祈りました。さらに現世より西方十万億仏土を過ぎた極楽浄土へ安らかに往生できることを願い、極楽浄土の教主阿弥陀如来に祈ったものと思われます。

時代が変わっても来世に安寧を求める人々の願いは変わりません。近世以降、多様な民間信仰のなか、あるいは信仰の対象としては人々から忘れられたものもありますが、地域で保存会を結成し大切に護持されている阿弥陀様をはじめ観音様や閻魔様らは、ここを訪れ静かに念ずるいずれの人をも、優しく見守ってくれることでしょう。

【松川町資料館】